

白夜の北極圏

—062C（標識白鳥）の子育てを見た—

本 田 清

筆者は一昨年（1992年）以来、「雁の里親友の会」の池内俊雄氏とタイアップし、「ロシア科学アカデミー・チャウンステーション訪問団」の結成を働きかけていた。当初報道関係者を含め20名ほどの応募者があったが、その後それぞれの事情で辞退者があり、最終的には8名の訪問団となった。この間、団員の皆さんには、訪問期間を15日間に短縮（当初20日間の予定）する事の下承を求めたり、追加負担をお願いしなければならなかったりと心苦しい一面も生じたが、幸いにも目的達成後、団員からは「すばらしい北極圏の旅だった」という感想を頂戴する事が出来愁眉を開く事が出来た。この間、コーディネーターとして幾多の困難を克服して協力してくれた池内俊雄氏と、その受け入れ窓口として充分な役割を果たしてくれたロシア科学アカデミー北方生物問題研究所のターニャ女史に感謝する。

完備されたチャウンステーション

ガソリンを満タンにした大型ヘリは、我々一行と補給物資を満載しシュミッタ（アラスカを睨む東部シベリアのロシア軍レーダー基地）を飛び立った。延々と2時間余り、チュクチ山地に源を発し蛇行する大小河川と無数の湖沼群を眼下にしながらいきなり飛び続けた。距離にしてほぼ新潟～東京間くらいか。やがて流水を残すチャウン湾が広がり、チャウン川の河口地帯の湖沼群が見えた時高度を下げ着陸態勢に入った。低空飛行中、営巣中の白鳥の姿を見とどけて着陸。

当日は晴れ時々曇りという気象、気圧1,018hpa、気温17℃前後。マリナ女史（所長）の御家族5人とゲナーディ、ピタリーの両博士が出迎えてくれた。地上での挨拶もそこそこに早速シベリア蚊の大群の大歓迎を受ける。

ロシア科学アカデミー北方生物問題研究所の極地における施設は完備されていた。年中稼働しているディーゼルエンジンの発電機の力で、各部屋にスチーム暖房も通り、シャワーさえも存分に使えた。この施設がなければ白夜の夏期と極夜の冬期を通じての科学者たちの研究生活は困難なのだろう。

10年前越後蒲原の水田に初渡来

1984年11月18日、新潟県黒埼町の水田で私自身が観察していた標識コハクチョウ幼鳥の「062C」。この白鳥のカップルのシベリア原野における子育ての実際を、この目で確かめる事が出来た。マリナ所長の「標識白鳥が来ていますよ。」というセッションで現地での第一発見者は堀川大輔さん（新潟）。これをスポッティングスコープで確認したのは菊池昶史さん（水戸）。この「062C」の巣ごもりを7月3日以来10日間に渡り交代でブラインドの中で観察し、10日目（7月12日）の朝、そ

の雛たち2羽の誕生を見とどけて同行団員8名、それぞれに成果を収め7月中旬無事帰国する事が出来た。

これまで30年間、白鳥の行動学をめざして突き進み、蓄積してきた私のデータが一気に開花し、結実したかのような成就感を覚えた。無数に展開するツンドラ湖沼群のなかでの「062C」との邂逅は、まさに“九牛の一毛”を引き当てた様なもので幸運だったの一語に尽きるだろう。

現地、チャウンステーション所長のマリーナさんによれば、今夏の東シベリア海地方の天候は不順で1982年以来の冷夏とのこと。確かに観察期間中雪降りの日が2回もあり、この時の外気温-0.2度、そんな日の観察行動の装備には十分な気配りが必要だった。

この悪天候のため、7月11日に迎えにきてくれる手筈だったヘリコプターが山越え出来なくなって飛来しなかった。しかし、翌12日は一転して快晴となり、この朝早く「062C」の雛は誕生した。写真記録上、不運と思われていたこれまでの気象条件が一転して幸運を迎えることになり貴重な最後の1日となった。それにしても帰国後日本の夏の猛暑に遭遇し、北極圏の夏の寒さは何だったんだろうと思いつけていた。

沈まぬ太陽・活動する鳥たち

北緯69度、東経170度の北極圏、太陽は午後12時頃真北にあり地平線から約10度くらいの低い位置にあるが沈まない。曇天の日でも新聞の読める明るさ。そのまま地平線上を右回りに1周する。正午には当然ながら南中し、30度くらいのところまで昇る。

私たちは朝の5時頃目覚めて活動を始めるが、鳥たちは、白夜の夏を休みなく働く。とはいえ太陽が最も低くなる頃には、さすがに少しおとなしくなる。

「062C」の巣は、小さい沼の中州にあった。ゲナーディ博士の指導を得て、巣の目前約30メートルの岸辺に日本から持参したブラインド（テント）を張らせていただいた。

以降2名づつ2時間交代で、1日8時間ほどの観察を続けた。ステーションから現場まで湿地を歩いて約20分で到着出来る。

このブラインド通いの行き帰り、網の目の様に連なるいくつもの湖沼群を迂回して帰る事もあった。希有壮大、白夜は昏れず、道々多様な渡り鳥たちの繁殖行動を見たり、高山植物の花を撮影したりと忙しかった。

雪降りの寒気のさなか、気温、水温の計測、植物採取、プランクトンの採取など精力的に走り回っていた菊池昶史さんや、最高齢（1928年生まれ）ながら、珍しい高山植物や野鳥を尋ね回り、最も遠出をいとわなかった桑本和一さん（長野県諏訪町）など、それぞれの分野で活躍していた。

ツンドラの野鳥サバイバル

「062C」の巣ごもりの様子は、当初一見動きが少なく緩慢の様に感じられた。しかし、観察を続行するうちに、抱卵する雌雄の交代劇を見たり、ほぼ15分前後の間隔で巣の補修行動や転卵行動が見られた。また、白鳥の巣の北側10mほどの高見に、敵対するセグロカモメが同様に巣ごもりしていて、この雄と思われる大カモメが、時折、白鳥の巣をめがけて急降下攻撃をする。この時白鳥の雄はどこからともなく巣まで飛んで帰り、猛然と首をまっすぐ上に伸ばして威嚇の大声を発しながら撃退する。この小さい中州にはアビの巣、ケワタガモの巣も見られたが、観察8日目の正午頃、ケワタガモの雛3羽が瞬り親鳥の後について泳ぎ出した。この時、大カモメの急降下の一撃で、雛

1羽が犠牲になった。この後大カモメはこのケワタガモの巣を荒らし、残っていた雛1羽も丸呑みにしてしまった。弱肉強食、食物連鎖の実態をここでもしっかりと見た。白鳥は通常、天敵はいないと言われる。しかし、空巣状態の時の卵と雛はケワタガモと同じ運命となる。

これまで、繁殖期のコハクチョウ数は換羽期と重なり一定期間飛べないと言われていたが、この地のコハクチョウの場合、換羽は徐々に進行するので飛べない期間はないと言う事も分った。巣は継続して形づくられる

コハクチョウの巣の計測上の形状は、底辺約1.4m前後、高さ約30cm前後で富士山状である。その火口部分にある直径約30cmほどのくぼみに卵を生み、最終卵を生み落した直後から約30日間に渡り主に雌が抱卵、時に雄を交代しながら孵化させる。

今回、この巣づくりの方法の後半の部分がある程度つかめたように思う。まず巣材の主なるものは、水生植物の茎や葉などだが、これを雌雄が巣の近くまで運んでおく。(巣は、前年造られたものを補修しながら使うことが多い。)雌は、その巣材を巣の頂上に昇って嘴を使って引き上げる。巣材を引き上げる首の方向は、360度に渡り自在で巣のめぐりを万遍なく回転しながら徐々に巣材をせり上げていく。時に腹部の綿毛を自らの嘴で引き抜いて敷き込む。この行動を繰り返す事によって自ら巣の形状は定まっていく。つまり、巣の頂上を踏みしめている脚の位置を支点とし、その白鳥の首の長さに比例する形で巣が形成されていく。しかし、何年も使われている古い巣の場合は、しっかりと形づくられているが、新しい巣は高さも低く粗雑な感じがする。このことによって当然ながら小型のコハクチョウの巣はオオハクチョウの巣よりも少し小型となる事が分かる。

この巣づくり、あるいは巣の補修行動は、抱卵中でもほぼ15分間前後の間隔で常時行なわれており巣の完成期というものを特定することは出来ない。

ちなみに、巣づくり行動の前半には、チャウン地方において交尾行動が確認された例はなく、ゲナーディ博士によれば北上期の途上どこかで行なわれているのだろうという。

チャウン “キグヌス” よ飛んでこい

ステーションの北東側半径約7kmの範囲に広がる湖沼群には、コハクチョウ5組の営巣が確認され、巣には1卵ないし4卵のものまで見られた。このうち4卵の巣からは2羽が巣立ったが、防害する者がいたため2卵がとり残された。観察中のゲナーディ博士は直ちに出勤し、この2卵を体温で温めながら持ち帰った。すぐに孵卵器に入れ孵化を待った。

翌日、1卵からコハクチョウが誕生した。ゲナーディ博士は日本の皆さんに命名して欲しいという。意見多出、結局私が命名する事となり “チャウン・キグヌス (白鳥座)” と名付けた。そして次に誕生する予定のもう1羽にはカシオペア (これも星座名だが、シベリアに咲くヒメシヤクナゲのロシア名) と命名した。冷夏のツンドラにめげずに咲き競うカシオペアはピンク色の可憐な花であった。

晩秋の夜空のキグヌス (白鳥座) が天頂を翔けぬける頃、シベリアのチャウン・キグヌスも日本列島をめざして渡来してくれることを待ち望んでいる。

繁殖しない100羽以上の白鳥

ステーションの北西6kmのクリーク地帯に、コハクチョウの非繁殖集団がいることを観察行動2日目に全員で確認していた。この中にもう1羽の標識鳥のいることもつきとめていた。しかし、こ

の時は、全員撮影に夢中になり、標識符号は読みとれなかった。

7月9日、気圧1,020hpa以上に上る。しかし依然として晴れず。この日、渡辺央さん（長岡）、菊池昶史さん（水戸）の2団員は、あらかじめ昼食抜きを宣言して再び非繁殖群の観察に出掛けた。

私は午後3時頃本間一人さん（新潟県横越村）と共に、この日2回目のブラインドに向かう。遙か地平線上に渡辺組の姿を認めたので、トランシーバーで「成果ありや否や」を問うてみた。すぐに渡辺さんからの返信あり「非繁殖群142羽をカウントし、その中に「064C」を確認しました。」と。「御苦労様でした。その白鳥も越後平野で幾度も観察されているものです。感謝感激です。」と応答。その晩、野鳥識別の鬼、渡辺さんと生物学者菊池さんの成果に花が咲き、ウォッカの乾杯が重ねられた。

第2世代の生き残り・高齢出産

観察した2羽の標識白鳥は、1984年8月27・28日、コンドラチェフ博士らによってチャウン川付近で着標されたもの。この時に標識された幼鳥群は合計10羽であったが、このうち1羽の標識は脱落、その後越冬地日本列島で確認されたのは7羽であった。冒頭写真②の3羽の標識鳥は「062C」のほかに61・68の符号が見られ、同シーズンの北上期には福島潟で同67も加わり、4羽が合流している写真記録（本間一人）も残されている。

「062C」は、標識コハクチョウの、言わば第2世代とも言うべき存在で、最後の生き残りと思われる。

1974年から82年までに着標された第1世代群54羽は、それぞれ日本列島で着実に確認記録を重ね、中継地から越冬地までの到達状況や、その繁殖傾向など貴重なデータを残して、ほぼその尊い使命を終えている。

「062C」は今年で満10歳。首輪標識の赤色はすっかり退色し、上下ともに少しV字型に欠けている。何分にも高齢出産と思われるので今シーズンの飛来時の親子の態様が懸念される。

きらめく野鳥の夏羽の彩

団員8名はいずれ劣らぬ観察眼の持ち主。毎日の情報交換が楽しかった。

なかでも渡辺央さんの目は特別の様で、珍しい野鳥を見つけるのも一番早く、ユキホオジロの巣と雛の巣だちまでも見届けて記録したり、北極圏におけるカルガモの巣と卵を発見して来たりと詳しかった。またコハクチョウの非繁殖群の中にアメリカコハクチョウ1羽がいることもつきとめてきた。全期間を通じ全員で30種以上を観察したが、大半は渡辺・菊池組の情報によって私らも知る場所となった。

10数年間、極地研究所に通いつめているゲナーディ博士によれば、この地でこれまで70種ほどの渡り鳥を見ているが、今夏は冷夏のせいかな鳥の数が少ないと言う。我がチームはわずか2週間ほどの日程でその50%ほどを観察した事は立派と言うべきだろう。

ウェーダーを履いて歩いて行くツンドラの草地、すぐ足元から飛びたっていくユキホオジロや、シギ類の夏羽の色の羽ばたきの、目の覚める様な色彩のきらめきが、いまなお網膜に焼き付いている。

豊饒なツンドラに支えられて

地球のてっぺんと言われる北極圏。今年の東部シベリア方面は1982年以来の冷夏であると言う。

このため蚊の発生する気温と言われる12℃以上に昇ったのは最初の7月3日だけで、その後は寒い日が続き、防虫用具は使用しないまま終わった。このため、雛の食餌となる藻類の生育やプランクトンの発生状況も遅れている様であった。また日本の高山に咲く花々の60%はツンドラ地帯にも見られるが、その身丈は低く花も小さかった。しかし、コハクチョウの好んで食べるコケモモやガンコウランの実は地面にびっしりと熟していた。豊饒なるツンドラであった。

研究所の生活も申し分なく快適であった。毎食ごとに変化するメニューとマリーナ所長手造りのロシア料理の数々。御主人（ヘミングウェイに似ている）の獲ってきたカリブーや大きなマスなどを使った見事な郷土料理？をたらふく頂戴。

毎日、湿地を歩き続ける観察活動の激務にも体調を崩す者が1人も出なかった。

流通革命はシベリアの果てまで及んでいる様でバナナ、イチゴ、トマト、キュウリ何でも食卓に上っていた。

10万の湖沼群のなかのただ1点

現地をフィールドのひとつにしているゲナーディ博士に対し、団員のなかから多くの問いが発せられた。そのひとつは「このチャウン湾地方の湖沼はいくつあるのか。」と言うもの。ゲナーディは冗談だがとことわりながらも「10万湖以上だ」と答えた。われわれはその数字の巨大さに思わず笑ってしまったが、大いに納得出来た。どこまでも続くツンドラ地帯に複雑玄妙な姿で充満している大小の湖沼群は、山々の頂を数えるよりもはるかにむずかしく、人知のなし得ない無辺際のものがある様に思えた。この数知れない湖沼群の、針の先の様な1点の沼に私は「062C」の巣と繁殖行動を見届けた事の僥倖にひたっていた。

そして、北極圏の広大なツンドラと、わが越後平野は繋っている事を実感した。故に、佐潟、鳥屋野潟、福島潟、朝日池などの残存湖のその面積のあまりにも小さい事について考えさせられた。

生命共同体と言われる地球、水辺あつての生命、せめて越後平野の残存湖をかき集め、1日も早くラムサール条約の登録沼湖に指定する事に努め、しっかりと子孫に伝えていきたいと思う。

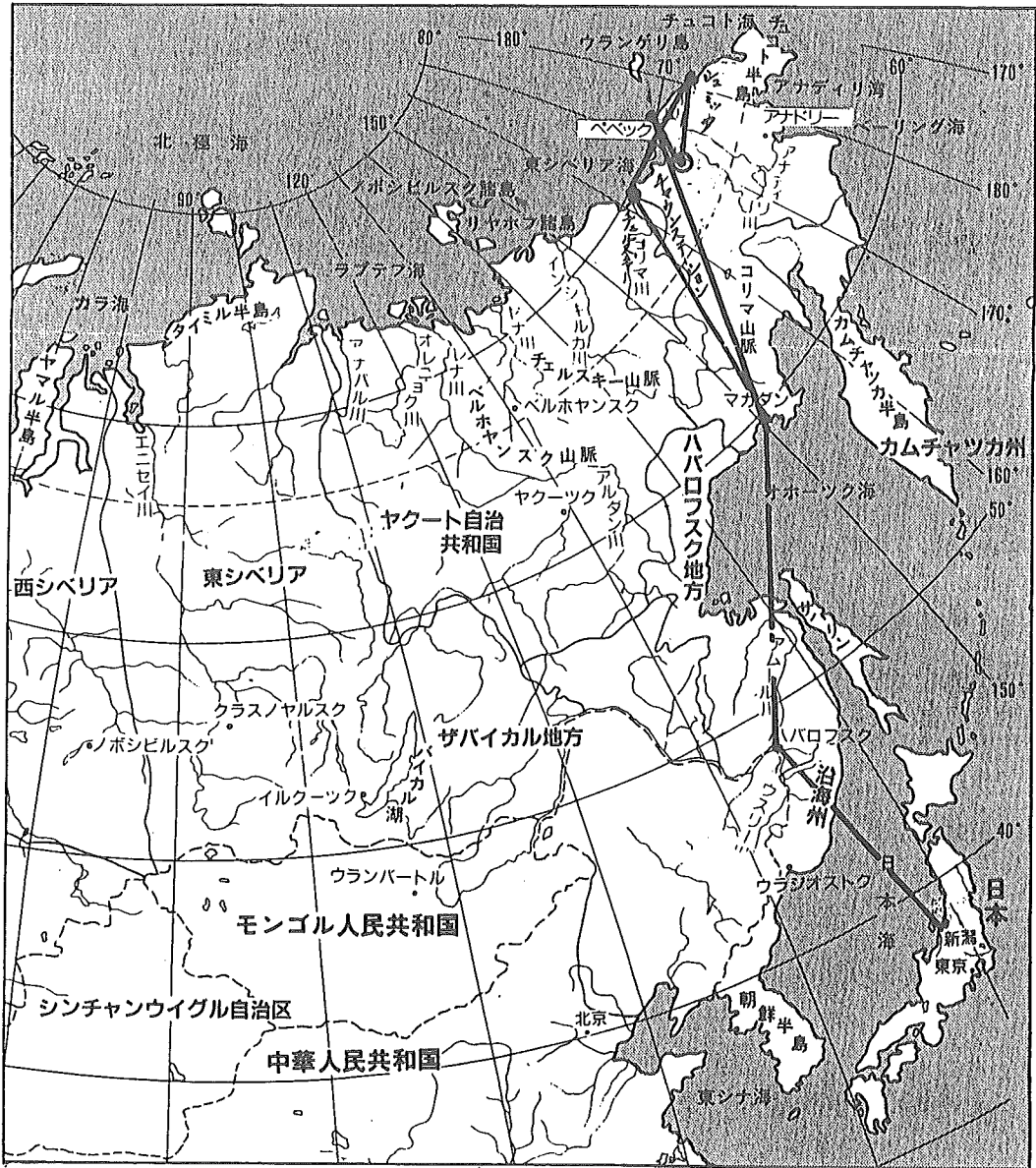
(本会副会長)

シベリア北極圏コハクチョウ繁殖地訪問コース

新潟（アエロフロート） --- 1時間50分 --- ハバロフスク

--- アエロフロート --- 2時間30分 --- マガダン（双発の飛行機チャーター便） --- 4時間

--- チェルスキー（給油のため） --- 2時間 --- シュミッタ（ヘリコプターチャーター便） --- 2時間 --- 目的地チャウンステーション





チャウンステーション、マリーナ所長（前列右一家と訪問団員）。



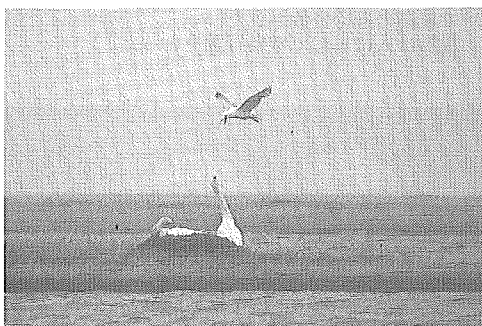
ヘリコプターから見たチャウン川とチャウン・ステーション全景。



7月4日午後11時頃の白夜の太陽。



抱卵中も巣づくろいを止めない062C。



雪降りの日、062Cの巣を襲うセグロカモメ。巣を守るために飛んで帰って来たオス。



7月12日朝、062Cのカップルは二羽のヒナを誕生させ巣から離れていった。



左方の沼の小さい中州に062Cは営巣し、2羽のヒナを育てた。



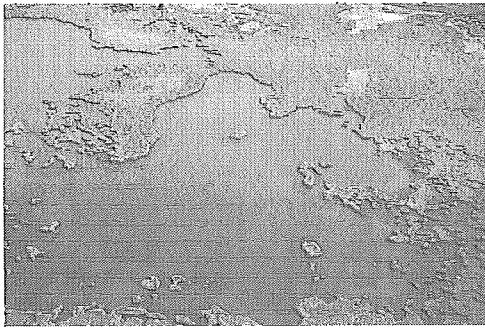
営巣地から4 km以上離れて生活している非繁殖コハクチョウ。



7月9日朝、孵卵器の助けをかりて誕生した
チャウン・キグヌス。



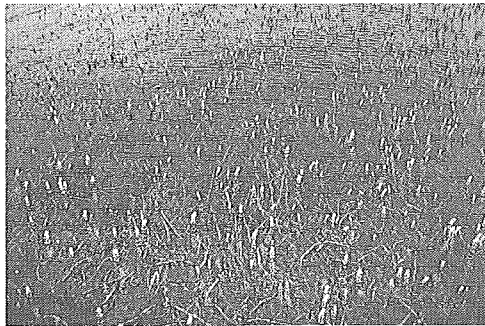
研究棟をつなぐ木道の上で給餌を受けるユキ
ホオジロのヒナ。



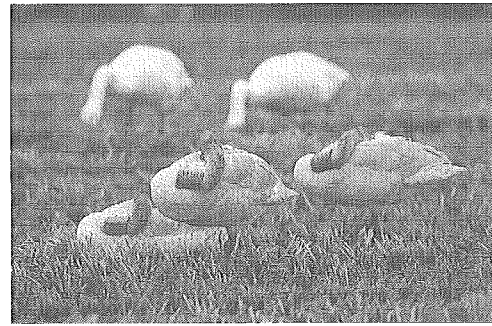
上空200mから見たチャウン・ステーション付
近の湖沼、中央の中州にコハクチョウが白い
点になって見えた。



とり残されたヒナはビタリー博士の手によっ
て親鳥の近くに放された。
親鳥は人に対して威嚇行動をとった。



アッケシ草に似た植物。オオハクチョウらも
食べる。



(旧ソ連邦)
ロシア科学アカデミー・コンドラチェフ博士
らがチャウン湾(シベリア東北部)付近で着
標(1984年8月27・28日)した062C、068C。
1984年11月18日新潟県西蒲原郡黒埼町板井地
区の水田に初渡来中撮影(800mmレンズ)
1985年3月24日福島潟では067Cと合流してい
た。

撮影者 本田 清